



## 「第二次日本経穴委員会」便り

～第45回 WHO/WPRO標準経穴部位公式版発刊記念講演会を終えて～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 かわはらやすひろ  
河原保裕

2004年4月に第二次日本経穴委員会を発足して以来、日中韓の非公式会議を11回、経穴委員会としての作業部会会議を45回行い、2006年10月に「WHO経穴国際標準化公式会議（つくば会議）」を経て、経穴部位の国際標準化を達成することができた。

経穴部位標準化決定に伴い、WHO/WPROにより『WHO/WPRO標準経穴部位公式版』が2008年5月16日に出版された。発刊記念講演会は、第二次日本経穴委員会主催で、全日本鍼灸学会京都大会に合わせ2008年5月30日に同会場の国立京都国際会館Room Eにて世界に先駆けて開催された。その内容は公式版発刊記念セレモニー、記念講演、標準経穴報告会で、200人の方に参加して頂き成功裏に終えることができた。

### 記念セレモニー

記念セレモニーは午後1時からであったが、我々には式典を開催する準備の時間はあまりなく、前日に開催場所の京都に入って夜に打ち合わせ、また当日の午前中に打ち合わせと慌しく開催準備を進めた。当日になり当然のことながら公務のため急遽出席が見合わされる方がいたり、挨拶原稿の差し替えがあったりと予定通りには進まなかった。しかし、式典が始まってし

まえば各委員は慣れたものであり、粛々と式典を進行していった。式典では経穴委員会の形井秀一委員長の挨拶から始まり、WHO/WPROや厚生労働省医政局の代表、運営団体5団体長など次の方々から祝辞を頂いた。Dr. Choi Seung-Hoon (WHO/WPRO伝統医学地域諮問官)、赤羽根直樹氏 (厚生労働省医政局研究開発振興課)、矢野忠氏 (全日本鍼灸学会会長)、石野尚吾氏 (日本東洋医学会会長)、相馬悦孝氏 (日本鍼灸師会会長)、谷口和久氏 (東洋療法学校協会会長)、緒方昭広氏 (日本理療科教員連盟会長)。また、当日出席いただけなかったWHO/WPRO事務局長の尾身茂氏から祝辞のメッセージを頂き、盛大に式典が執り行われた。

### 記念講演会

セレモニーに引き続き、発刊記念の講演会を開催した。講演はDr. Choi Seung-Hoonと茨城大学の真柳誠教授に依頼し、快く引き受けてくださった。

Dr. Choi Seung-Hoonには「経穴部位標準化の意義とWHOが目指すもの」という演題で講演を行って頂いた。WHO/WPROは「エビデンスに基づいた手法による標準化」というテーマを基に、様々な伝統医学におけるスタンダー

ド化を図っている。その中で伝統医学用語や経穴部位、百科全書的医学情報、臨床語彙体系学、医学索引分類、EBM伝統医学技術ガイドラインなどの多岐にわたる伝統医学に関する標準化プロジェクトを推進している。今回はその一翼である経穴部位国際標準化という作業に一定の成果があり、今後の鍼灸臨床EBMや学術・研究に対してのグローバル化が図られ、鍼灸医学に関する新たなスタートが切られたことを強調された。

引き続き茨城大学の真柳誠教授より「経穴部位標準化の歴史的意義」という演題でお話を頂いた。長い歴史の中で経穴の標準化は、今回で4回目を迎えたことになり、具体的に第一次標準化は、『素問』『靈枢』の前身が紀元1世紀頃に成立し、12カ月と同数の正経12脈および任脈・督脈に経脈概念を整理統一したことである。次に第二次標準化は、3世紀頃の『明堂経』で初めて正経12脈と奇経8脈に属する約350穴に学説が整理されたこと、第三次標準化は北宋政府が『銅人腧穴鍼灸図経』を1026年に編纂し、14経354穴を国家レベルで確定した時である。しかし、第一次の概念レベルも第二次の学説レベルも第三次の国家レベルも結局は主観に基づく標準化ゆえ後々相違が生じた。1980年に始まるWHOの伝統医学プログラムを始め、1989年の標準361穴名などの表記統一、今回の経穴部位統一は、客観性を備えた第四次の標準化が世界レベルでなされたことであり、科学の歴史を典型的に示しているという内容であった。また中国の出土品の中から、普段お目にかかれぬ貴重な写真もスライド提示していただき、非常に有意義な講演であった。

## 標準経穴報告会

報告会では、「経穴部位決定のためのガイドライン」と「注目経穴の解説」、「日本語版の課題」について報告を行った。「経穴部位決定のためのガイドライン」は第二次日本経穴委員会の坂口俊二委員が、用語と定義について、標準計測単位（骨度・同身寸・指幅寸）、解剖学的肢位と方向に関する用語、取穴のための体表指標、体表区分、基準経穴の説明を行い、また経穴部位決定の原則と方法について、部位決定法（解剖学的指標・骨度法・同身寸法）、経穴の記載、別説の経穴の解説を行った。「注目経穴の解説」は同委員会の浦山久嗣委員が解説し、経渠（LU8）、肩髃（LI15）、不容（ST19）、衝門（SP12）、青靈（HT2）、支正（SI7）、攢竹（BL2）、陰谷（KI10）、天泉（PC2）、臑会（TE13）、風池（GB20）、膝関（LR7）、瘕門（GV15）、廉泉（CV23）の14穴について、変更点やそれらの補足説明を行った。また、「日本語版の課題」は、形井秀一委員長から、英語表記とひらがな表記について、第二次日本経穴委員会で検討した原則や方向性の説明と、今後さらに関係機関と検討を重ねることが報告された。

## 今後について

今後、第二次日本経穴委員会は日本語翻訳版発刊に向けての最終準備や『標準経穴学【部位篇】』（仮題）の編纂に取り掛かる予定である。一難去ってまた一難…。まだまだ作業は山積みである。我々が中心となって進めてきた経穴部位標準化の軌跡を後世への貴重な資料として残すためにも、緒を締めなおさなければいけないと考えている。